談論風発
INTERVIEW

野崎 治子
NOZAKI Haruko

堀場製作所
理事

ステンドグラスのように個性輝く関西へ

～個性を引き出し、違いを強みに変えていく～

「エデュース」という言葉があります。エデュケーションの語源ともいわれ、引き出すという意味があるそうです。当社の創業者・堀場雅夫がこの言葉を引いて、「天は二物を与えずというのは、みんな必ず一つはエエとこがあるという意味で、それを引き出すのが管理職のミッション。せっかくこの世に生を受けたのだから、天が与えた才能を輝かせ、それをとことん生かしきるのが社是“おもしろ おかしく”や」と教えてくれました。

当社では、ダイバーシティ&インクルージョンの取り組みを「ステンドグラスプロジェクト」と名づけています。“ステンドグラス”というのは、当社の強みを聞かれたときの現会長の堀場厚の言葉です。教会のステンドグラスのガラスは大きさも色も形もみんな違います。だからこそ美しい。それぞれの違いを強みに、美しく輝き成長する企業にしたい、という願いを込めています。

「個」を生かす取り組みの一つが、障がい者の活躍です。昔は計算ができないことを障がいと考える人はいませんでした。障がいの定義はその時々の社会が作っているのではないでしょうか。しかし現実には、障がい者というくくりで進学や就業、昇進を制限されがちです。そんな風潮をものともせず、障がいを強みに変えて世界を舞台に活躍されている方と出会い、障がいがある人の就職・成長・活躍の機会を創出しようと、志を同じくする企業33社で一般社団法人「企業アクセシビリティ・コンソーシアム（ACE）」を運営しています。経営者には、ビジネスに資する人材戦略として障がい者雇用を見直すとともに、当事者、当事者を支える職場や同僚、スタッフの熱い思いに目を向けて後押しをお願いしたいと思います。

また、私が学長を務めている「ホリバカレッジ」は、社員の専門能力を高め、暗黙知を伝える社内大学です。研修での一番人気は「先人が語る」というセッションです。ベテラン社員から苦労や失敗の経験を聞くと、世代を超えた共感が生まれます。企業にとって、社員全員がかけがえのない仲間です。コミュニケーションにより理解や感謝、尊敬が生まれ、一人ひとりをつなぐことは企業の大事な役割であると考えています。

ダイバーシティの対象には、国籍や男女の違い、障がいのあるなし等があげられますが、乗り越えるのが一番難しいのが世代間ギャップ、経験の違いだといわれています。葛藤があるのは当たり前です。けれど、いろんな人が集まることによって、均一社会では見えないものが見えるようになるのではないか、感じられないことを感じられるのではないか。違いを面白がることからイノベーションが生まれてくると信じています。

昨年から関経連のスポーツ振興委員会に参加させていただいています。スポーツは、体力・気力・判断力を育てます。私自身はまったくの運動音痴ですが、「やる」だけでなく、「見る」「支える」という楽しみ方を学生時代に知りました。スポーツには多様な種目、ポジションがあり、だれもが活躍できる場があります。もちろん努力してもすぐには報われないかもしれない。けれども努力しないことには始まりません。努力は可能性を広げ、いつか何らかの形で輝けるという信念を持つに至りました。スポーツ仲間との付き合いを続けていますが、いろんな人がいて、まさにダイバーシティそのものです。

人には、働く顔、家庭の顔、地域の顔、PTAの顔、女子会の顔など、いろんな顔があります。モノトーンではなく、それぞれの顔がステンドグラスのように色とりどりに輝く生き方が私の理想です。

関西は、多様な文化や風土、特長を持った企業や地域の集まりです。日本の中でもこれだけ個性が強く、さまざまな色や形で輝いているところはないですよね。おのおのの良さがひきたつのが「ONE関西」の神髄。2021年に関西広域で開催されるワールドマスターズゲームズで、各エリアが多彩に輝くことを楽しみにしています。（談）